慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	心の解明に向けた道のり
Sub Title	
Author	西村, 太良(Nishimura, Taro)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.3, (2008. 3) ,p.1- 1
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000003-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　グローバルCOEプログラム　論理と感性の先端的教育研究拠点

Newsletter

2008 March No, 3

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

心の解明に向けた道のり

慶應義塾常任理事　西村太良

2001年に塾長が文学部の学部会議に来られたときのこと、渡辺茂さんが特に発言を求めて、次のようなことを提案した。19世紀は物質、20世紀は生命を明らかにしてきたが、21世紀は心の問題に取り組むべきではないか。そのためには心の問題を扱う研究所が必要だと。私はこの言葉に大いに共感するところがあったので、2002年にいわゆる21世紀COEプログラムの募集があった際に、渡辺さん、岡田さんなどを中心に、文学研究科、社会学研究科、言語文化研究所のメンバーの協力を得て「心の解明に向けての統合的方法論構築」というプロジェクトを立ち上げた。人文科学分野では学際的研究はあっても、実験系と非実験系の異なる方法論による共同研究というのは、いわば未知の領域で、冒険ではあったけれども、将来取り組むべき課題ではあるし、面白そうだという点で皆共通の認識を持っていた。

しかし、実際には試行錯誤の連続で、まずこの「心」をどのように翻訳するかということが問題となった。結局、とりあえず「Mind」としたが、実際に意味するところは、それぞれの研究者によって微妙に異なっていたような気がする。私が専門とする古典ギリシア語では精神活動を表す言葉は少なくとも8つあり、そのそれぞれが時代やジャンルによって意味の領域が変化している。Mindに一番近いと思われるのはnousだが、この言葉ほど謎めいた言葉はないと言ってもいいだろう。渡辺さんもこうした点に注目して広義の心、狭義の心とか、ソフトな心とハードな心といった表現をしていたが、今度の「論理と感性」というテーマの、いわばロゴスとパトスの二項関係も、こうした問題意識を背景としているのではないかと思う。

このたび、新たに渡辺さんをリーダーとして、グローバルCOEプログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」が始まったことは、こうした経緯からも、理想の研究組織にまた一歩近づいたようでとても喜ばしいことである。特に今回は光トポグラフィーに加えてfMRIを使ってより深く、また精密な測定が可能となり、また国際的な共同研究の体制もますます緊密になって、その成果には大いに期待される。若い研究者たちには、恵まれた研究環境を思う存分に利用して未知の領域に勇気をもって足を踏み入れ、大いに冒険してほしいと願っている。

Contents

心の解明に向けた道のり　1
各班研究紹介　2
第2回全体シンポジウム「理屈？屁理屈？理屈ぬき？―考える心、感じる心―」　4
第3回全体シンポジウム“Rational Animals, Irrational Humans”　5
活動報告　6
研究員紹介　8